

友 禪

森口華弘のわざ

文部省選定
教育映画祭優秀作品賞
日本映画ペンクラブ推薦



苦心の技術・時糊の記録

共立女子大学教授
染織研究家

北村哲郎

この映画には二つの重要な意義がある。その一つは、森口さんの仕事に対する執念ともいえるべき、ひたむきな作家の生きざまが映像として記録された点である。森口さんはこの映画が企画され、撮影に入る直前病床につかれ、右手の自由を失なって約一年余御静養を余儀無くされた。さいわい御養生の甲斐あって本復され、苦しいリハビリテーションを強い精神力で耐え抜き、見事に右手の機能も回復されて、この映画の完成に漕着けたのである。こうした事情は直接映像と関り合っていないようだが、映画全体に漲る張りつめた緊張感はその反映といえよう。映画は一見淡々と友禪の仕事を追っているが、見終った時には長い時間を過ぎた後のような気分であった。このことは見る側にもその緊張感が伝わり、息を凝らして見ていた何よりの左証であろう。

もう一つは森口さんの創始と言ってもよい時糊の技術がかなり詳細に記録されていることである。無形文化財の技術記録の映画といえは当然かもしれないが、永年苦心して研究開発された特色ある技術を目のあたり見られることは、誠に幸と言わざるを得ない。また所々に差し挟まれている森口さんの言葉は、次代の人達への何よりの示唆、励しとなる。ぜひ多勢の方々に見て頂きたい作品である。



「精華」(一九八九年)



「菊」(一九七〇年)

友禪のわざ・伝統をうけつぐ新しき

映画評論家 登川直樹

森口華弘さんは友禪染めのわざを最高に高めた人間国宝である。この映画のなかで、華弘さんは一枚の友禪の着物を仕上げてみせる。図柄をきめ、下絵を描き、糊を置き、色を挿し、というふうな作業の一つ一つを丁寧に追っていく。こんなに細かい作業工程を重ねるものであることに、まず驚かされる。今はもうそれらが分業化されているというが、その工程を丹念に自分のわざとして貫いていく華弘さんの仕事ぶりを見ていると、興味をひかれ、多くを教えられる。

自然の色やかたちを知りつくした上で、それを大胆に様式化する図柄には、華弘さんの鋭く豊かな感性が読みとれるし、綿密な手作業には、この人の緻密な神経が行き渡っているのを知る。友禪が仕上がって美しい女性の装いとなったとき、はじめてそれが生きてくるという考え方が、作品の美を高いものにしていく。いつも新しい技法を編みだし積み重ねていく心があるのは、始めて伝統を受け継いでいくことができるのだと納得した。何よりも森口華弘さんの人柄を感じさせる映画である。

- 企画—文化庁
- 製作—(株)桜映画社
- 規格—16ミリ・カラー・30分
- 価格—200,000円(消費税別)

●——あらすじ

日本人は、昔から花や自然を着物に染めて楽しんできた。
なかでも、友禅は花の衣装の王座を占める。

京都は、優れた工芸の伝統を受け継いできた街である。森口華弘の工房は、その京都の染色の街の一隅にある。

森口文様の基礎は、絶えまないスケッチから生まれた膨大な下絵の蓄積である。スケッチの操返しの中で樹や花の生命感をつかみとる。

今回の作品は早春の光の中に、愛らしい花をつける梅の古木がテーマである。構想がまとまると着物の形に仮絵羽した白生地の上に木炭であたりを取り、青花で直接、下絵をかく。これは森口華弘独特の手法である。

下絵が完成すると仮絵羽を解いた布帛の上に下絵の線に沿って糸目糊をひく。これも彼自身がやる。下絵の線はしばしば無視され、糸目によって更に下絵が生きてくる。そして、青花おとし、呉汁による地入れ骨豆と続く。これから挿友禅（色挿し）である。今回の作品は出来るだけ色数を少なくし色の濃淡によって華麗な友禅の美を創り出す事を意図している。友禅は淡い色から挿して行く。

森口華弘は三十数年前のある時、京都の庭園で白砂が光によって様々に変化するのを見て蒔糊の新しい展開を思いついた。苦心を重ねて作りだした技法、色蒔糊を用いて完成した作品「早春」は彼が世にでるきっかけになった。そして「菊花文様」「流水」などの作品で、蒔糊による絢爛たる世界を展開した。

数々の工程をへて流水の中から文様が姿を現す。森口友禅の完成である。

仕立て上がった衣装を着た若い娘が庭園を歩く。
「友禅は色が華やかなだけでは駄目だ。着る人の内面の美しさを引き出すお手伝いが出来る様な女性らしい華やかさを我々作家は追求する」それが、染色作家の原点だと森口華弘は語っている。

《森口華弘(もりぐち かこう)略歴》

- 1909年 — 滋賀県野洲郡守山町に生まれる。
- 1921年 — 守山尋常小学校を卒業の後、京都で薬剤師をめざして勉強する。(12歳)
- 1924年 — 友禅師三代中川華郎の徒弟として住み込み学ぶ。また一方で、疋田芳沼に師事し、日本画を学ぶ。(15歳)
- 1936年 — 林智恵と結婚。(27歳)
- 1939年 — 師の中川華郎の下から独立して工房を持ち、「蒔糊」の技法を創案して試み始める。(30歳)
- 1943年 — 軍需工場に徴用されて、終戦の年まで勤める。(34歳)
- 1952年 — 京都工人社に加わり、伝統工芸の保護・育成、創造性豊かな活動に情熱を傾ける。(43歳)
- 1955年 — 「早春」を完成。(46歳)
- 1956年 — 「薫」を完成。日本工芸会の正式会員となる。(47歳)
- 1957年 — 「梅林」を完成。(48歳)
- 1959年 — 「四季の香」、「流水」を完成。(50歳)
- 1967年 — 重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定される。(58歳)
- 1969年 — 「残雪」を完成。(60歳)
- 1970年 — 「菊」を完成。(61歳)
- 1971年 — 紫綬褒章を受章。(62歳)
- 1974年 — 京都市文化功労賞を受賞。(65歳)
- 1975年 — 「菊花文様」を完成。(66歳)
- 1989年 — 「精華」を完成。(80歳)



森口華弘の友禅「精華」製作工程

- 1 仮絵羽した白生地の上に木炭で下絵の図柄を割りつける
- 2 ほたる草の青い花からとった青花の液で、直接下絵をかく
- 3 友禅染の骨格ともいわれる糸目糊を置く作業
- 4 染料により模様部分を彩色する挿友禅(色挿し)
- 5 色蒔糊は、水を引いた生地の上に指先で軽くむむようにして糊粒を蒔く
- 6 固く付着した蒔糊の上を、刷毛で地色に引染める

●——協力
東京国立近代美術館
京都国立博物館

●——スタッフ
製作=村山和雄
脚本・演出=山添 哲
撮影=江連高元
照明=水村富雄+岡本健一
編集=中根信也
解説=伊藤惣一
音楽=長沢勝俊
録音=甲藤 勇